

プロジェクトの沿革

1 2009 年度のプロジェクトの組織

2009 年度は昨年度までの 4 つの研究グループに、新たに DNA 研究グループを加えて活動を行った。各研究グループの構成については以下に、日本人・外国人の順で、それぞれ五十音順およびアルファベット順に列挙する。なお、* はコアメンバーで、所属は 2009 年度当時のものである。

【プロジェクトリーダー】

長田 俊樹 総合地球環境学研究所・教授（言語学）

【古環境研究グループ】

岡村 眞 高知大学教育研究部自然科学系・教授（地学）
 奥野 淳一 国立極地研究所・特任研究員（地震学）
 熊原 康博 群馬大学教育学部・講師（自然地理学）
 久米 崇 総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員（土壌水文学）
 竹内 望 千葉大学大学院理学研究科・准教授（雪氷生物学）
 堤 浩之 京都大学大学院理学研究科・准教授（地球物理学）
 長友 恒人 奈良教育大学教育学部・教授（年代測定学）
 中野 孝教 総合地球環境学研究所・教授（資源環境地質学）
 前杵 英明* 広島大学大学院教育学研究科・教授（自然地理学）
 松岡 裕美 高知大学教育研究部自然科学系・准教授（地質学）
 宮内 崇裕 千葉大学大学院理学研究科・教授（地形学）
 八木 浩司 山形大学地域教育文化学部・教授（変形地形学）
 横山 祐典 東京大学海洋研究所・准教授（気候変動学）

【生業研究グループ】

宇田津 徹朗 宮崎大学農学部附属農業博物館・准教授（農学）
 大田 正次* 福井県立大学生物資源学部・教授（農学）
 河瀬 眞琴 農業生物資源研究所・研究主幹兼基盤研究領域ジーンバンク長（農学）
 木村 李花子 馬事文化研究所・所長（生物学）
 小坂 康之 総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（民族植物学）
 佐藤 洋一郎 総合地球環境学研究所・教授（植物遺伝資源学）
 千葉 一 東北学院大学・非常勤講師（経済学）
 藤本 武 人間環境大学人間環境学部・准教授（文化人類学）
 三浦 励一 京都大学大学院農学研究科・講師（農学）
 森 直樹 神戸大学大学院農学研究科・准教授（植物遺伝学）
 湯本 貴和 総合地球環境学研究所・教授（生態学）
 P.P. Joglekar デカン大学考古学科・准教授（動物考古学）
 A.K. Pokharia ビルバル・サハニ古植物学研究所・准教授（植物考古学）
 S. Weber ワシントン州立大学・准教授（DNA 考古学）

【物質文化研究グループ】

上杉 彰紀	総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（考古学）
宇野 隆夫*	国際日本文化研究センター・教授（考古学）
遠藤 仁	総合地球環境学研究所・プロジェクト研究推進支援員（考古学）
小磯 学	神戸夙川学院大学観光文化学部・准教授（考古学）
酒井 英男	富山大学大学院理工学研究部・教授（地球科学）
丹野 研一	山口大学農学部・助教（考古学）
寺村 裕史	総合地球環境学研究所・プロジェクト研究員（考古学）
山口 欧志	国際日本文化研究センター・機関研究員（考古学）
P. Ajithprasad	マハーラージャ・サヤジラーオ大学・教授（考古学）
J.M. Kenoyer	ウィスコンシン大学人類学部・教授（考古学）
J.S. Kharakwal*	ラージャスターン・ヴィディヤपीード大学・准教授（考古学）
Q.H. Mallah*	シャー・アブドゥル・ラティーフ大学・教授（考古学）
F. Masih*	パンジャブ大学考古学科・教授（考古学）
V.S. Shinde*	デカン大学考古学科・教授（考古学）

【伝承文化研究グループ】

永ノ尾 信悟	東京大学東洋文化研究所・教授（インド学）
大西 正幸*	総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員（言語学）
北田 信	東方研究会・研究員（言語学）
児玉 望	熊本大学文学部・准教授（言語学）
後藤 敏文*	東北大学大学院文学研究科・教授（インド学）
高橋 孝信	東京大学大学院人文社会系研究科・教授（インド学）
高橋 慶治	愛知県立大学外国語学部・教授（言語学）
外川 昌彦	広島大学大学院国際協力研究科・准教授（文化人類学）
藤井 正人	京都大学人文科学研究所・教授（インド学）
前川 和也	国土館大学 21 世紀アジア学部・教授（西アジア史）
松井 健	東京大学東洋文化研究所・教授（文化人類学）
森 若葉	総合地球環境学研究所・プロジェクト上級研究員（言語学）
A. Parpola	ヘルシンキ大学・名誉教授（インド学）
M. Witzel	ハーバード大学・教授（インド学）

【DNA 研究グループ】

植田 信太郎	東京大学大学院理学系研究科・教授（生物科学）
神澤 秀明	総合研究大学院大学生命科学研究科・大学院生（遺伝学）
斎藤 成也*	国立遺伝学研究所・教授（遺伝学）

【プロジェクトメンバー外協力者】

天谷 孝夫	岐阜大学応用生物科学学部・教授（国際農環境工学）
-------	--------------------------

稲垣 和也	大阪大学外国語学部・非常勤講師（言語学）
桐生 和幸	美作大学・教授（言語学）
窪田 薫	東京大学理学部・学生（地球化学）
下岡 順直	金沢大学環日本海域環境研究センター・連携研究員（年代測定学）
中内 惇夫	岐阜大学応用生物科学学部・大学院生（土壌水文学）
中村 淳路	東京大学理学部・学生（地球化学）
三宅 尚	高知大学教育研究部自然科学系・教授（植物学）
山田 智輝	東北大学大学院文学研究科・大学院生（インド学）
山花 京子	東海大学文学部文明学科・非常勤講師（考古学）
D.P. Adhikari	トリブバン大学・准教授（地質学）
V. Dangol	トリブバン大学・教授（地質学）
D. Frenéz	ボローニャ大学・講師（考古学）
M. Tosi	ボローニャ大学・教授（考古学）

2 2009年度のプロジェクトの活動

A 全体の活動

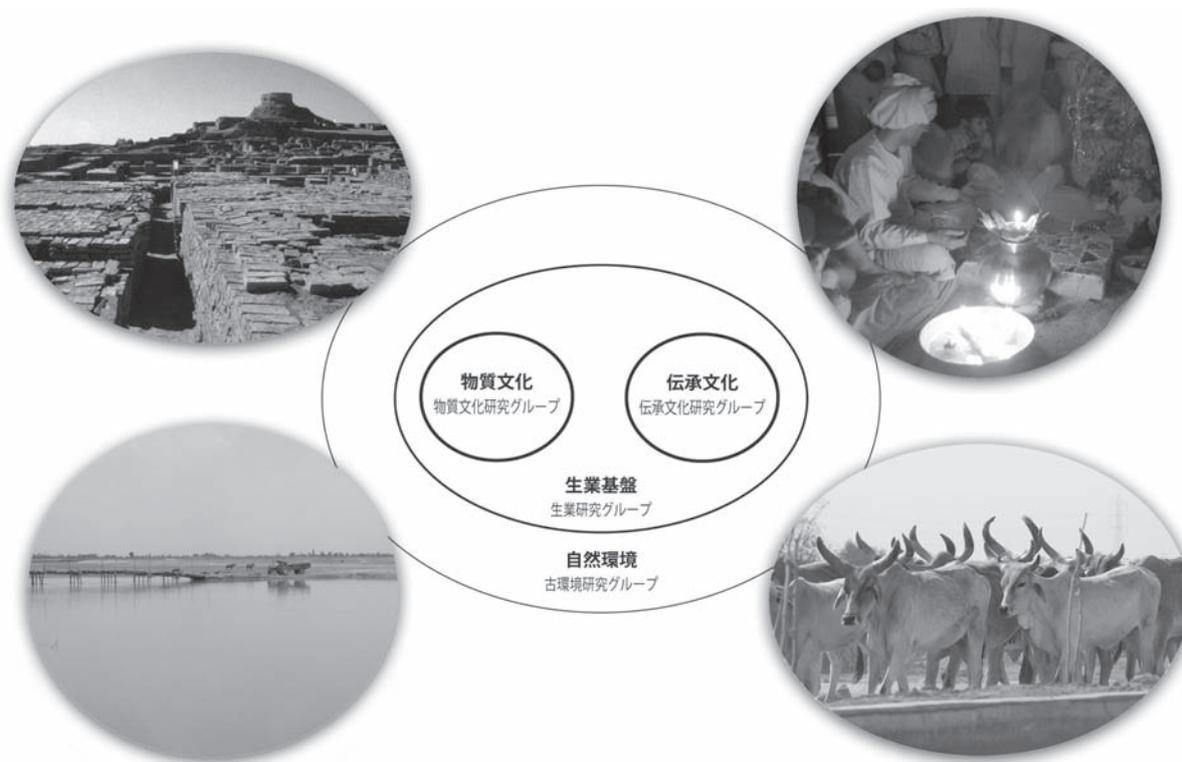
まず、インダス・プロジェクトの全体活動報告をおこなう前に、インダス・プロジェクトの研究組織をもう一度おさらいしておこう。われわれはプロジェクトの研究を進めるために、以下の研究グループにわかれて、研究活動をおこなっている。

- 1) 古環境研究グループ (Palaeo-Environment Research Group=PERG)
- 2) 物質文化研究グループ (Material Culture Research Group=MCRG)
- 3) 生業システム研究グループ (Subsistence System Research Group=SSRG)
- 4) DNA 分析研究グループ (DNA Analysis Research Group=DARG)
- 5) 伝承文化研究グループ (Inherited Culture Research Group=ICRG)

それぞれのグループにはコアメンバーがいる。そのうち、日本側メンバーのお名前だけをあげておく。(1)は前杵英明・広島大学大学院教育学研究科教授、(2)宇野隆夫・国際日本文化研究センター教授、(3)大田正次・福井県立大学生物資源学部教授、(4)斎藤成也・国立遺伝学研究所教授、(5)後藤敏文・東北大学大学院文学研究科教授である。このうち、(4)については、2008年度のファルマーナー遺跡で人骨が出土したので、そのDNA分析のために、2009年度からたちあげたものである。また(5)はさらにインド学グループと言語学グループに分かれ、前者の代表が後藤教授で、後者の代表としてコアメンバーに入っているのが大西正幸・総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員である。それぞれのグループの活動報告については、例年のように、これらのコアメンバーによっておこなわれる。ここではそれぞれのグループの活動以外のインダス・プロジェクト全体にかかわるような出来事を中心に報告する。

では、カレンダーにしたがって、プロジェクト全体にかかわる出来事をあげておこう。

2009年4月28日



プロジェクトのコンセプト

ドイツのボンで開催された IHDP(International Human Dimensions Programme) の会議で地球研に割り当てられたセッションにおいて、上杉と長田の連名で長田が発表。発表のタイトルは Diversity of Natural Resources and Human Activities in South Asia : Approach from the Indus Civilization である。

2009年5月29日

発掘報告会(詳細はニュースレター第5号を参照)では、以下の発表がおこなわれた。

- F. D. Kakar (Director-General, Archaeological Department, Pakistan Government) “On Archaeological Works in Pakistan”.
- V. Shinde (Dept. of Archaeology, Deccan College, India) “Excavations at Farmana, Haryana, India 2008-09”.
- N. Saitou (National Institute of Genetics, Japan) “On the Burial Site at Farmana”.
- J. S. Kharakwal (Dept. of Archaeology, Rajasthan Vidyapeeth, India) “Excavations at Kanmer, Gujarat, India 2008-09”.
- P. Ajithprasad (Dept. of Archaeology, The Maharaja Sayajirao University, India) “Excavations at Shikarpur, Gujarat 2008-09”.
- Q. H. Mallah (Shah Abdul Latif University, Pakistan) “Further Archaeological Investigation in the Lower Hakra Basin of Sindh, Pakistan”.

ここで強調しておきたいのは、インドとパキスタンでの発掘成果の発表を同時におこなった

ということである。われわれのプロジェクトが推し進めてきた国際協力が、プロジェクト終了後も続くことを望んでやまない。

2009年5月30日・31日

ハーバード大学と地球研の共催によるラウンドテーブル（詳細はニュースレター第5号を参照）では、以下の発表がおこなわれた。

13th Harvard University Round Table
ETHNOGENESIS OF SOUTH AND CENTRAL ASIA (ESCA)
Kyoto Session, Research Institute for Humanity and Nature (RIHN)

PROGRAMME

May 30

立本成文（地球研所長）：Introduction .

Discussion on the dispersal of agriculture and domestic animals in Asia, especially South Asia .

Dorian Q Fuller (London University): Late Harappan “Collapse”, the Opening of Central Asia and Long-Distance Crop Movements.

Steven A. Weber (Washington State University): Cropping Strategies and the Indus Civilization: New Crops, Regional Variation, and Climatic Adjustments.

竹井恵美子（大阪学院大学）：Two Very Different Millets: *Setaria italica* and *Spodiopogon formosanus*, in Asia.

Richard Meadow (Harvard University): The Spread of Domestic Animals in South and East Asia.

Current Trends in Harappan Archaeology

Jonathan M. Kenoyer (Wisconsin University): Cemetery Assemblages, Stratigraphy, and Chronology: A View from Harappa.

Brian Hemphill (California State University): Harappa: The Role of an Urbanized Bronze Age Populace in the Population History of South Asia.



パキスタン考古・博物館局長官 F.D. Kakar 氏



ラウンドテーブル参加者

Vasant Shinde (Deccan College): Human Burial Customs in the Ghaggar-Kutch Regions in the 3rd-2nd Millennia BC: An Analytical Approach.

P. Ajithprasad (Maharaja Surajrao University): The Harappan Burials in Gujarat .

May 31

Discussion on wide connection between South Asia and Gulf including issue on Indus scripts

Steve Farmer (Independent Scholar): The Collapse of the Indus-Script Thesis, Five Years Later: Massive Non-literate Urban Civilizations of Ancient Eurasia.

Daniel Potts (Sydney University): Four World Quarters in the Late 3rd Millennium BC: Ur, Shimashki, Meluhha, Magan (and the Bits in Between).

Asko Parpola (Helsinki University): The Asiatic Wild Ass (*Equus hemionus*) in Harappan, Dravidian and Indo-Iranian Record.

On the diversity of wheat DNA types and linguistic diversity in India.

笹沼恒夫 (山形大学) : Genetic Diversity of Afghan Wheat Landraces and Their Potential for Future Breeding.

Hsin-Fu Yen (National Museum of Natural Science): Traditional Management of Agrobiodiversity on Rukai Aboriginal Peoples in Taiwan .

Michael Witzel (Harvard University): A Hot Spot of Linguistic Diversity in the Greater Hindukush/Pamir Area: The Names of Agricultural Plants.

2009年6月5日

Nilofer Shaikh さんを迎えての MoU (詳細はニュースレター第5号を参照) を締結。園田建による地球研ニュースレターへの報告をここに転載しておく。



シャー・アブドゥル・ラティーフ大学との MoU 締結式
(中央が Nilofer Shaikh 学長と佐藤洋一郎・地球研副所長)

研究プロジェクト、「環境変化とインダス文明」では、パキスタンのシンド地方での共同研究を実施するために、パキスタンのシャー・アブドゥル・ラティーフ（SAL）大学と MoU（研究協力に関する覚書）を、去る平成 21 年 6 月 5 日に締結しました。

2007 年に SAL 大学から Q.H. マッラー（Mallah）博士を招へい外国人研究員として迎え、共同研究を進めてきました。そして、本プロジェクトのパキスタンでの調査をさらに進展させるために、SAL 大学との間で MoU を締結する事に至りました。MoU の締結式にあたって、SAL 大学からは学長のニローファー・シェイフ（Nilofer Shaikh）博士と同大学教授のマッラー博士が来日されました。

締結後には、シェイフ博士に SAL 大学が発掘調査を実施しているインダス文明の都市遺跡ラーカンジョダロ（Lakhanjodaro）の発掘について講演していただきました。今回の MoU 締結により、SAL 大学とのパキスタンにおけるより一層の調査連携が可能となりました。今後の調査成果にご注目ください。

2009 年 8 月 28 日～9 月 25 日

ネパール・ララ湖でのコアリング。こちらは古環境研究グループの調査だったが、地球研からリーダーの長田とプロジェクト研究員の寺村が参加した。その成果のいくつかは今回の古環境グループの報告にある。また、参加者の日記がニュースレター第 6 号に掲載されているので、詳細はそちらを参照。

2009 年 10 月 14 日

コアメンバー会議。当日の進行は以下の通り。今回から斎藤成也が参加。

- 13:00-13:10：プロジェクトリーダー挨拶（長田）
- 13:10-13:40：2009 年度の物質文化研究グループの活動（宇野）
- 13:40-14:10：2009 年度の生業研究グループの活動（大田）
- 14:10-14:40：2009 年度の伝承文化研究グループの活動（後藤／大西）
- 14:40-15:00：休憩
- 15:00-15:30：2009 年度の DNA 研究グループの活動（斎藤）
- 15:30-16:15：2009 年度の古環境復元研究グループの活動（前杢）
- 16:15-17:05：プロジェクトの今後の方針・予定
- 17:05-17:30：事務連絡

2009 年 10 月 21 日～23 日

コペンハーゲンでの国際会議。リーダーの長田、コアメンバーの前杢、プロジェクト研究員の寺村の三名が参加。

2009 年 11 月 14 日

全体会議

- 11:00-12:00 コアメンバーによる打合せ
- 12:00-13:00 昼食
- 13:00-13:15 プロジェクトリーダー挨拶（長田）
- 13:15-14:00 物質文化研究グループの活動報告（宇野・上杉・寺村）
- 14:00-14:45 生業研究グループの活動報告（大田・千葉・三浦）
- 14:45-15:15 伝承文化研究グループの活動報告（後藤・大西）
- 15:15-15:30 休憩
- 15:30-17:00 古環境復元研究グループの活動報告（前杢・岡村・熊原・宮内・八木・横山）
- 17:00-17:15 DNA 研究グループの活動報告・計画（斎藤・神澤）
- 17:15-17:30 事務連絡

2009年12月5日

ベトナム・ハノイで開催された IPPA (Indo-Pacific Prehistory Association) で以下の発表をおこなった。

長田俊樹：Environmental Change and Indus Civilization

Jeewan Singh Kharakwal: Kanmer: A Harappan Site, Gujarat, West India: An Indo-Japanese Project.

宇野隆夫：Excavation of Farmana, A Harappan Site, Haryana, India.

寺村裕史：GIS Applications in the Indus Project, RIHN: Case Studies in Progress at Kanmer and Farmana, India

当初の予定ではシンデがファルマナー遺跡の報告をおこなう予定であったが、所用で欠席したために、宇野が代わって報告をおこなった。

2009年12月11日

地球研発表会での発表。2009年度は評価委員会での発表がないため、地球研の発表会での発表だけとなった。発表はコアリングをメインにしたものであったが、発表が終わった段階で、2009年度終了プロジェクトのリーダー白岩准教授がプロジェクト発表への好意的見解を表明したために、これまでの批判的論調とは違って、全体として心暖かいものとなった。一番前に座っておられた所長が終始笑っておられたのが印象的であった。

2009年12月18日

インド総領事スワループさんを迎えての市民セミナー。大西正幸による地球研ニュースレターの報告を転載しておく。

第36回地球研市民セミナー

「現代インドの経済発展と環境問題」

今回の市民セミナーは、2009年8月に駐大阪神戸インド総領事として赴任されたヴィカース・スワループ氏の、インド政府の環境政策をめぐる講演を中心に、後半は聴衆や長田俊

樹教授からの質問やコメントに対しスワループ氏が答える形で構成されました。スワループ氏は、アカデミー賞受賞映画「スラムドッグ\$ミリオネア」の原作者としても著名な方です。雨模様の寒い日にもかかわらず、ホールは百人近い聴衆で埋まり、熱気にあふれた議論が展開されました。

前半の講演で、スワループ氏は、まずインドの分離独立後のめざましい経済・社会発展の実情を具体的なデータをもとに紹介した後、インド政府が現在の環境問題と貧困問題にいかに向き合っているかについて、詳しく説明しました。特に気候変動については、インドの多様な環境資源や、モンスーンに依存する農業生産への影響が大きいことから、政府として重点的に取り組んでおり、CO2 排出削減の目標値を定めることはしないが、さまざまな環境汚染要素に対する法規制や、植林、代替エネルギーへの投資等を通して、着実にエネルギー効率を改善してきているとの指摘がありました。その当時開催されていたCOP15においても、インド政府は、持続可能な地球環境の維持に向けて、世界各国との協力を積極的に取り組む方針で臨んでいるとのことでした。

後半では、人口増加、森林破壊、貧困問題、都市環境の悪化等に対するインド政府の対策について、幅広く質疑が交わされました。特に、故インディラ・ガーンディー首相の「環境問題は経済問題に帰着する」との言葉を引用して、インド政府が、2億人におよぶ貧困層に水や電気等の最低限の生活環境を提供することを当面の目標としている、と答えたのが印象的でした。また、最後に、スワループ氏の作家としてのインド観や、日本に対する印象についても、興味深い話を聞くことができました。

2010年1月28日～30日

インド・ブジでの国際会議。こちらは別記する。

これまでは時系列で紹介したが、それ以外に人的交流について述べておこう。

2009年度の招へい外国人研究員として、5月から8月末まで、ハーバード大学のヴィッツェル教授が地球研に滞在された。それにあわせて、ハーバード大学との共同で、ラウンドテーブルが開催されたことはうえて紹介した。すでに、2005年にヴィッツェル教授が東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究の客員教授に東京に滞在しておられた際に、佐藤プロジェク



ブジ・ラウンドテーブルの様子

トの共同で、ラウンドテーブルを開催した。その成果は現在、インドから出版されている。

Toshiki Osada (ed.) (2009) *Linguistics, Archaeology and the Human Past in South Asia*. Manohar Publications, Delhi.

出版物については、上記の本以外に、Occasional Paper の 8 号と 9 号の二冊と、Occasional Paper の 2 号のインド版である、Indus Civilization: Text and Context をマノハル出版社から刊行した。

なお、インダス・プロジェクトの成果発信として、長田が「インダス文明ははたして大河文明か」(秋道智彌編『水と文明—制御と共存の新たな視点』昭和堂)を執筆した。また、宇野・寺村が「南アジア・インダス文明都市の歴史空間」(宇野隆夫編『ユーラシア古代都市・集落の歴史空間を読む』勉誠出版)を執筆した。今後も成果を発信していきたいと考えている。

(文責 長田俊樹)

B 古環境研究グループの活動

古環境研究グループは 2009 年度も引き続きインドでの現地調査を継続するとともに、新たにネパールでの湖沼堆積物の採取調査を実施した。まず、インド・グジャラート州沿岸部で完新世中期以降の相対的海面変化と遺跡の分布調査をするサブグループ(宮内、久米、中内)は、2009 年 12 月 11 日～21 日、2010 年 3 月 13 日～17 日にロータル遺跡近辺で沿岸堆積物の掘削および表層土壌の採取調査を行った。表層土壌の採取はほぼ予定通り行われたが、掘削調査については、堆積物が乾燥し固結していたため、予定の深度にドリルが到達できず、次年度以降に雨季をねらって再度調査を行うことになった。

ヒマラヤ前縁帯の先史時代の地震活動と遺跡分布について調査するサブグループ(熊原)は 2010 年 2 月 27 日～3 月 10 日に、インド・パンジャブ州、ヒマーチャル・プラデーシュ州のヒマラヤ前縁帯活断層上で、地震活動履歴を復元するため、トレンチ掘削調査を行った。トレンチ断面には表層付近の堆積物を変位させる断層が現れ、地層の堆積年代を示す炭化物などを採取した。

2009 年 8 月下旬～9 月下旬にかけて、西ネパール・フムラ郡にあるララ湖において、完新世後半のモンスーン変動を明らかにするために、湖底堆積物のコアを採取する調査を行った。プロジェクトから 10 名を越すメンバーが協力し、6 本のコアを採取することに成功した。また湖底や湖岸の地形調査も行い、これまで発表されていた地形データを詳細化することができた。

その他、世界の文明と環境に関する研究動向をさぐるため、前杵が 2009 年 10 月 17 日～25 日までコペンハーゲン大学で開催されたシンポジウムに参加し、情報収集と意見交換を行った。2010 年 1 月 25 日～2 月 2 日には、本プロジェクトの研究成果を世界に発信するための国際シンポジウムが、インドのブジで行われ、前杵が古環境グループの研究成果を発表した。



ララ湖でのコアリングの準備

(文責 前杵英明)

C 生業システム研究グループの活動

生業システム研究グループは、遺跡から出土する植物遺物をもとにした古民族植物学的研究と現存の植物利用をもとにした民族植物学的研究を両輪として、インダス文明期の日常生活の復元を目的としている。日本人メンバーは現存の作物種を対象として下にあげる民族植物学的調査ならびに遺伝分析を行っている。

- 1) 現存の在来作物の分布、栽培、利用についての現地調査と遺伝学的特性の解明
- 2) インダス遺跡周辺で現在栽培される作物種とその作付け体系の解明

現地調査

2009 年度は以下の 3 回の現地調査を実施した。

1) 2009 年 8 月 18 日～9 月 24 日 大田正次、千葉一 カルナータカ州とマハーラーシュトラ州
調査期間前半、カルナータカ州中部ベッラリ県およびカルナータカ州西部ダールワドゥ県とガダグ県（西ガーツ山脈東麓）において、千葉がエンマーコムギの栽培と利用について聞き取り調査を行った。調査期間後半、マハーラーシュトラ州南部から北部において、大田と千葉がエンマーコムギの栽培と利用について聞き取り調査と種子の収集を行った。

2) 2009 年 9 月 14 日～9 月 29 日 三浦勲一
カーンメール、ウダイプル、ラクナウー
昨年度 1 月から 2 月に実施したカーンメール村での冬作物の調査に加えて、夏作の作付け状況をカーンメール遺跡を中心とした約 2 km 四方の範囲において、耕地の区画ごとに作目を歩いて調べ航空写真上に記録した。ウダイプルとラクナウーにおいてインダス期遺跡の状況を実見するとともに、A. K. Pokharia 博士と研究打ち合わせを行った。

3) 2010 年 2 月 5 日～3 月 13 日 森直樹、千葉
カルナータカ州とマハーラーシュトラ州
調査期間前半、カルナータカ州中部ベッラリ県中部から西部の村々において、収穫期のエンマーコムギの栽培状況と利用について実見および聞き取り調査を行った。調査期間後半、カルナータカ州北部ビジャール県とマハーラーシュトラ州南部サングリ県ジャトウ郡においてエンマーコムギとインド矮性コム



ブネーの市場でガタスプータナ儀礼に使う
エンマーコムギについての聞き取り

ギについて同様の調査を行った。

遺伝分析

京都大学と福井県立大学に系統保存されているエンマーコムギ 114 系統を 2008 年秋に播種、福井県立大学の非加温温室と圃場で 2009 年春にかけて比較栽培し、出穂特性について調査した(大田)。また、これらの系統に米国農務省ジーンバンクなどに保存されているエンマーコムギの系統を加えて、葉緑体 DNA マイクロサテライト座の変異を神戸大学において分析した(森)。

成果公表

各メンバーの研究業績欄に記載したように、2009 年度までの研究結果を含めて、インダスプロジェクト・ニュースレターに寄稿するとともに、日本雑草学会、経済地理学会、日本育種学会の講演会と学会誌において随時発表している。

(文責 大田正次)

D 物質文化研究グループの活動

2008 年度まででインドにおけるカーンメール遺跡およびファルマーナー遺跡の発掘調査は終了し、2009 年度は出土遺物の記録化および分析を中心に研究活動を実施した。

ファルマーナー遺跡については上杉彰紀、遠藤仁、小磯学が参加し、インド・マハーラーシュトラ州プネー所在のデカン大学および同国ハリヤーナー州ローフタク所在のマハリシ・ダヤーナンド大学において調査を実施した。本調査にかかる出張期間は、上杉が 4 月 15 日～5 月 24 日、7 月 15 日～10 月 31 日、1 月 21 日～3 月 24 日の計 3 回、遠藤が 7 月 29 日～8 月 26 日の計 1 回である。小磯はプロジェクト研究費外で 2009 年 8 月に調査に参加した。また、資料調査にあたってはデカン大学ディプロマ課程在学の小茄子川歩に助けていただいた。

一方、カーンメール遺跡に関しては、遠藤、小磯が出土遺物の記録化を担当するとともに、宇野隆夫と寺村裕史が 3D スキャナーによるデジタル記録を実施した。遺物の保管場所および調査場所はインド・ラージャスターン州ウダイプルに所在するラージャスターン・ヴィディヤピート大学考古学科である。遠藤が 7 月 29 日～8 月 26 日、12 月 21 日～1 月 17 日、1 月 26 日～3 月 24 日の計 3 回、小磯が 12 月 21 日～1 月 6 日、2 月 19 日～3 月 6 日の 2 回、宇野、寺村が 11 月 3 日～11 月 11 日に出張し、作業を行った。なお、宇野はプロジェクト研究費外による参加であった。

このほか 2010 年 2 月に、ハリヤーナー州ビーワーニー県所在のミータル遺跡において表面採集調査を実施したが、この調査には上杉、遠藤のほか、山花京子(東海大学講師)が参加し、同遺跡で生産が推定されるファイアンス製品の分析用サンプルを採取した。

学会活動としては、寺村が長田俊樹、前空



ラージャスターン・ヴィディヤピート大学での
3D スキャン作業風景

英明とともにデンマークのコペンハーゲン大学で10月21日～23日に開催された‘Pre-Modern Climate Change - Causes and Human Responses’と題した学会に参加した。また、11月29日～12月5日にベトナム・ハノイ所在のベトナム社会科学院考古学研究所 (Institute of Archaeology, Vietnam-Academy of Social Sciences) で開催された Indo-Pacific Prehistory Association の第19回学会に、長田、宇野、寺村が参加した。2010年1月28～31日にはグジャラート州政府考古局、ラージャスターン・ヴィディヤピート大学、インダス・プロジェクトの共催で学会を開催した。学会は‘Gujarat Harappans and Rural Chalcolithic Cultures’というテーマでグジャラート地方のインダス文明関連遺跡に焦点を置いたもので、インド国内だけでなく、日本、アメリカ、イタリア、フィンランドなどから参加者がおり、議論を深めることができた。

国内では上杉・遠藤が日本西アジア考古学会第17回西アジア発掘調査報告会(2010年3月28日)において、ファルマナー遺跡を中心とする調査成果について報告した。

(文責 宇野隆夫・上杉彰紀)

E 伝承文化研究グループの活動

E-1 インド学研究班

インド学研究班は、引き続き、ヴェーダ文献学、古典インドアーリヤ語文献学、現代インドの地域研究(文化人類学)などにわたり、「環境変化とインダス文明」という視点から個別研究を進めている。文献に在証される動植物、生産技術、物品名などの解明は、当時の生活環境の復元と、諸部族の動向、相互関係などの理解に欠かせない。古環境研究グループ、生業研究グループ、物質文化グループに情報を提供し、各グループの成果を取り入れて、インダス文明を取り巻く環境を俯瞰的、歴史的に捉えるべく努めている。

この間、特に、サラスヴァティー川に関する最古の言及が見られる『リグヴェーダ』の該当讃歌の研究を続け(山田智輝、後藤敏文)、「牛」を意味する単語の精査に取り掛かっている。その前提となる、古インドアーリヤ語文献に見られる「牛」関連語彙のリストアップ(それだけで数十頁にのぼる)は済んでおり(西村直子、大島智靖)、今後、個々の検証を進める(両名に後藤が参加)。アーリヤ系の人々が連れていたと考えられる *gáv-*(英語の *cow* などとともに印欧祖語 **gʷóu-* に遡る)と現在インド圏に優勢な「コブウシ」との関係、殊に、後者がヴェーダ文献に言及されるとすれば、何時頃から、どのようなものとして、という問題はインダス文明理解に欠かせない。西村直子(東北大学大学院文学研究科専門研究員)は博士論文(『放牧と敷き草刈り - Yajurveda-Samhitā 冒頭の mantra 集成とその *brāhmaṇa* の研究 -』として刊行、350頁、東北大学出版会 2006年)以来、祭式文献研究の基礎作業として乳製品の研究を進めており、平田昌弘准教授(帯広畜産大学、地域環境学研究部門植物生産学分野)と共同研究の機会をもちながら、ヴェーダ文献、仏典に見られる乳加工の実体を解明しているが、インド学研究班は、彼女の成果をも取り入れるべく努めている。インダス文明、アーリヤ諸部族、後のインド文化圏、それぞれにおける牛と乳製品の問題は、今後のプロジェクトに寄与をもたらす見込みがある。

文献研究においては、引き続き動植物一般への言及をはじめ、生活実態に関わるデータに注意している。インダス文明当時の生産方法、道具、習俗、衣装などの中には、現在まで各地に残るものの多いことが指摘されているが、文化人類学他のフィールド研究者による事実確認と収録、考古学関係者との摺り合わせは、未だに課題として残っている。考古学と文献学の知見

を照合する研究動向は広く世界の学会に見られるようになっており、2009年度にドイツで開催された文献学、言語学、考古学を総合する学会において、後藤が発表した。さらに、同発表に基づいて、ツューリヒ大学インド・ヨーロッパ語比較言語学講座公開講演で講演した。後藤はリグヴェーダ第7巻の翻訳と注解に携わったが、同巻はインド・イラン共通時代の観念を色濃く残すことで知られており、インダス文明後期のインド・イラン諸部族、インドアーリヤ諸部族の姿を確認すべく今後とも努める。

8-9月のネパール、ラーラー湖の地理学探査旅行には、山田智輝が参加した。その成果の一部を研究集会で発表してもらった。2010年1月末のBhuj研究会には後藤、山田が参加し、大いに学ぶことができた。今後の作業に活用できるよう、引き続き努力する。

(文責 後藤敏文)

E-2 言語研究班

言語研究班は、例年通り、2009年度も、「インダス言語研究会」と「言語記述研究会」の二つの研究会を定期的に関き、『南アジア言語地図』の作成と、言語記述の方法論の検討を中心に活動を行なってきた。また、「インダス言語研究会」では、年度末の3月に、熊本大学において、出版を控えた言語地図をテーマとする「フィールドリサーチセミナー」を開催した。「言語記述研究会」の方は、メンバーの論考を集めた『地球研 言語記述論集』の第2号を出版した。

【インダス言語研究会】

「インダス言語研究会」は、長田俊樹、大西正幸、森若葉、児玉望、高橋慶治の5名に、今年度から新メンバーとして北田信が加わった。また、地図作成のために、物質文化研究グループの寺村裕史と、研究助手の稲垣和也にも参加してもらった。会合は、ほぼ2ヶ月に一度のペースで開かれている。メンバー・参加者の専門は下の通りである。

長田俊樹 (ムンダ諸語、インド＝アーリヤ諸語、記述言語学、言語類型論)

大西正幸 (インド＝アーリヤ諸語、記述言語学、言語類型論)

森若葉 (シュメール語、文字論)

児玉望 (ドラヴィダ諸語、音韻論、記述言語学)

高橋慶治 (チベット＝ビルマ諸語、記述言語学、言語類型論)

北田信 (インド学、文献学、インド＝アーリヤ諸語)

寺村裕史 (考古学、文化財科学、GIS (地理情報システム))

稲垣和也 (記述言語学、オーストロネシア諸語)

研究会では、例年、それぞれが専門とする言語の文法記述に関する発表と検討の他、南アジアの言語、記述言語学、言語類型論などを専門とする研究者を随時招いて情報交換を行なっているが、今年度の活動は、『南アジア言語地図』完成に向けての解説原稿や地図の検討が中心となった。3月に「地球研版」をほぼ完成することができた。(この地図は2010年7月に出版された。)

2009年度に実施した研究会は以下の通りである。

第 10 回 2009 年 5 月 16 日 (土) 13:00 - 17:00
13:00 - 15:00 『南アジア言語地図』検討会
15:00 - 17:00 桐生和幸「ネワール語の文法」

第 11 回 2009 年 7 月 18 日 (土) 11:00 - 17:00
『南アジア言語地図』検討会

第 12 回 2009 年 10 月 10 日 (土) 11:00 - 17:00
『南アジア言語地図』検討会

第 13 回 2009 年 11 月 23 日 (土) 11:00 - 17:00
『南アジア言語地図』検討会 (熊本大学)

第 14 回 2009 年 12 月 26 日 (土) 11:00 - 17:00
『南アジア言語地図』検討会

第 15 回 2010 年 2 月 12 日 (金) 11:00 - 17:00
『南アジア言語地図』検討会

第 16 回 2010 年 3 月 15 日 (月) 10:00 - 12:00
『南アジア言語地図』検討会 (熊本大学)

フィールドリサーチセミナー『インド言語地図を読むー南アジアの言語分布の可視化』
(熊本大学大学院社会文化科学研究科との共催)

日時：2010 年 3 月 15 日 (月) 14:00 - 17:00

場所： 熊本大学文学部講義室

プログラム

14:00 - 14:15 長田俊樹

趣旨説明

14:15 - 14:30 寺村裕史

地理情報システム (GIS) を用いた言語分布の可視化

14:30 - 14:45 稲垣和也

南アジア諸言語の言語識別番号について

14:45 - 15:15 大西正幸

南アジア言語地図概観 インド=アーリヤ諸語の分布

(休憩)

15:30 - 16:00 児玉 望

ドラヴィダ諸語の分布

16:00 - 16:30 長田俊樹

ムンダ諸語/チベット=ビルマ諸語の分布

16:30 - 17:00 パネルディスカッション

【言語記述研究会】

「言語記述研究会」は、長田俊樹、大西正幸、森若葉の他、少数言語の記述を専門とする若手研究者が主要メンバーである。この研究会は、2007年4月より、毎月1度のペースで開かれ、言語記述の方法論や言語類型論をめぐる議論を積み重ねてきた。若手のメンバーが年々増え、ホームページも充実してきた。また、年度末には、昨年続き、大西と稲垣の共同編集による『地球研 言語記述論集2』を刊行することができた。

2009年度に実施した研究会は以下の通りである。

第17回 2009年4月3日（金）14:30 - 17:00

『地球研言語記述論集1』の配布と内容の検討、2009年度の予定

第18回 2009年5月20日（木）14:30 - 17:00

林由華 「宮古の形容詞」

野島本泰 「ブヌン語の「連続動詞構文」」

第19回 2009年6月17日（水）14:30 - 17:00

富田愛佳 「『車里訳語』の声調記号について」

野島本泰 「ブヌン語の「前置詞」」

第20回 2009年7月15日（木）14:30 - 17:00

長田俊樹 「ムンダ語の感情語」

大西正幸 「ベンガル語の“expressives”」

第21回 2009年9月30日（木）14:30 - 17:00

稲垣和也 「ナゴヴィシ・シベ語における類別辞の形態法と意味論」

第22回 2009年10月28日（木）14:30 - 17:00

仲尾周一郎 「ジュバ・アラビア語若年層スラングの諸特徴」

倉部慶太 「ジンポー（カチン）語における、動詞連続の文法化について」

野島本泰 「ブヌン語（南部方言）における「随伴者」の表現」

第23回 2009年11月25日（木）14:30 - 17:00

野島本泰 「ブヌン語における代名詞語幹からの動詞派生」

稲垣和也、富田愛佳

“International Symposium on Grammar Writing:

Theoretical, Methodological, and Practical Issues”に参加して

第 24 回 2009 年 12 月 16 日 (木) 14:30 - 17:00

千田俊太郎 「東シンブー諸語トーンの新資料: ゴリン語、ユリ語、スワウェ語を中心に」

第 25 回 2010 年 1 月 7 日 (金) 14:30 - 17:00

大西正幸 “CV reduction in South Bougainville Languages”
『地球研言語記述論集 2』の各原稿の検討と連絡事項の確認

第 26 回 2010 年 2 月 17 日 (金) 14:30 - 17:00

『地球研言語記述論集 2』の各原稿の検討と連絡事項の確認

(文責 大西正幸)

F DNA 分析研究グループの活動

概要

本グループは、今年度 (2009 年度) からコアグループとして立ち上がった。前年度末に斎藤がインドのファルマーナー遺跡を訪問し、現地に滞在していたデカンカレッジのジョーグレイカル博士とともに牛の骨数片を遺跡から直接サンプリングし、日本に持ち帰ってあったので、それをまず用いることにした。具体的な作業は、斎藤が兼任している総合研究大学院大学生命科学研究科遺伝学専攻の 5 年一貫博士課程に今年度入学した神澤秀明が行った。

牛の古代 DNA 抽出の試み

家畜牛には大きく 2 亜種 (*Bos taurus taurus* & *B.t. indicus*) が存在し、それらのあいだにはミトコンドリア DNA の塩基配列にかなりの差があることがすでに報告されていたので、ファルマーナー遺跡で発見された牛の骨がどちらの亜種に属するのかを判別するため、及び最終目的であるインダス文明時代の人間の古代 DNA を調べるための準備を兼ねて、牛のミトコンドリア DNA 塩基配列のうち、適切な部分を選んだ。

具体的な方法について教えを乞うために、東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻の植田信太郎教授および北海道大学理学部生物科学科の増田隆一准教授の研究室を見学し、いろいろな技法を学んだ。骨の切断などの前処理に必要な器具や古代 DNA を抽出するのに必要な機器を購入し、牛骨サンプルからの古代 DNA 抽出を試みた。慎重に何度も実験を繰り返したが、残念ながら DNA を抽出することはできなかった。4500 年前という古さと、気温や湿度の状況が DNA 分子を骨の中からすべて流出されてしまったのかもしれない。

(文責 斎藤成也)